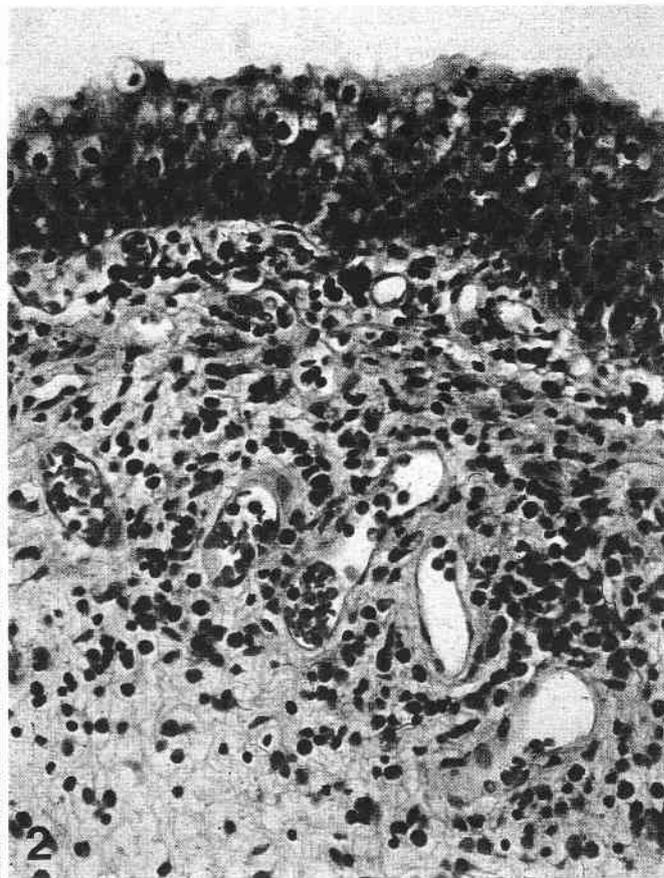


犬の膀胱腫瘤

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第39回獣医病理学研修会標本 No. 744



動物：犬，シベリアンハスキー種，避妊雌，6歳，体重30.5kg。

臨床事項：1997年8月18日に血様，および粘液様の排尿を主訴で，本学家畜病院に来院した。超音波，X線検査で膀胱壁の限局性肥厚を認めた。BUN値，creatinine値の軽度の上昇を認めた他は血液学検査，血液生化学検査で著変を認めなかった。尿沈渣では軽度の異型を伴った上皮細胞を認めた。尿の細菌検査，犬糸状虫検査は陰性であった。試験的開腹手術が行われ，膀胱の肥厚部は摘出された。

肉眼所見：膀胱粘膜は，表面は籐壁状で発赤と一部には出血斑も認めた。粘膜および壁は顕著に肥厚していた。剖面では，膀胱の全層にわたって，浮腫を認めた。

組織所見：粘膜固有層から漿膜に至る全層に渡って高度の水腫を認めた（写真1，HE）。粘膜上皮は過形成性，乳頭状に増生していた。また上皮の変性，ならびに上皮内への好酸球の浸潤を認め，一部では好酸球性の微小膿瘍の散在を認めた。一部には糜爛を認めた。粘膜固有層ならびに粘膜下組織には，び

まん性に，多数の形質細胞と好酸球の浸潤が認められた（写真2，HE）。漿膜下の結合組織には，多数の好酸球と好中球の浸潤が認められた。粘膜固有層から漿膜に至る結合組織では水腫と共に膠原線維の増加を認めた。好酸球の浸潤は平滑筋内にも認められ，その部分の筋線維束は分断されその間隔は広がっており，一部の筋線維は変性していた。また漿膜下の血管周囲では膠原線維の増加が顕著であったが，フィブリンの析出は僅かに認められる程度であった。PAS，グラム，グルコット染色で細菌は検出されなかった。

診断および考察：本例の病変は，膀胱壁全層の高度の水腫と好酸球浸潤を伴う慢性炎症として特徴づけられる。ヒトではこの様な特徴を示す膀胱炎を特殊な型と分類し，間質性膀胱炎と命名していることから，本例を「間質性膀胱炎を疑う高度な水腫を伴う好酸球性慢性膀胱炎」と診断した。獣医学領域では間質性膀胱炎と言う診断名は用いられておらず，今後症例を重ねその原因を含めての検討が必要であると考えられる。